

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その35）

～「指導者と選手の絆 その2」～

2022年2月吉日

U12部会広島地区SV 大庭浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

2月になってもコロナウイルス感染者の高止まり状況が続いています。中止が心配されていた6年生大会も、一応3月19日以降での実施予定となりました。

まだまだ先が見えないことはとても不安ではありますが、それでも早く練習が再開し、そして練習試合や6年生大会が行われることを願うばかりです。

いずれにしても選手の健康を第一に、今まで以上、コロナウイルス感染対策を十分にとりながら、日々の生活を送ることが大切です。

6年生の皆さんは、卒業まで残りわずかとなりました。バスケットボールの仲間とはもちろんのこと、学級や学年の友達との良い思い出がたくさんできるように、一日一日を大切に過ごしてほしいと思います。

俳人、小林一茶の句に「目出度めでたさもちう位くらいなり也おらが春はる」というものがあります。「ちう位くらい」とは、小林一茶の古里信州弁で「いいかげんな」という意味だそうです。新しい年を迎えてもあまりめでたくないことを詠んだ句ですが、今の広島地区の状況もまさにこの通りですね。

「雪ゆきとけて村一ぱいむらいっのこども哉かな」。一茶が別の句で詠んだように、これから暖かい春を迎えるにあたりコロナが収束し、子どもたちが元気に動き回ることを、そしてバスケットボールをする姿をあちこちで見ることができるとをただただ願っています。

話は変わりますが、先日、職場から歩いて帰っていると、路地からボールをつく音が聞こえてきました。そっと覗いてみると、女子中学生が一生懸命ドリブルの練習をしていました。不審者と思われぬようしばらく眺めている（十分、不審者ですね・・・笑い）と、レグスルーの練習ばかりで、その他のスキルは行いませんでした。せっかくするならもっと他のスキルもすればいいのに残念だなと思いながら、その日はそのまま帰宅しました。

家に帰っても、一生懸命練習している中学生の姿が頭から離れず、またどう考えてもレグスルーだけでは残念なので、後日、知り合いの中学生を通して、自分が指導しているミニバスチームのドリブルスキル（ボール1個用と2個用）の資料を渡しました。

すると渡して2日後、その中学生からお礼の手紙が職場に届きました。そこには「レグスルーだけでなく、いろいろなスキルが大切であることが分かりました。今は個人練習ですが、今のうちにしっかりスキルを身に付け、全体練習が再開したら、習得したスキルを試してみたいです。そして思いっきりバスケットボールを楽しみたいです」と書いてありました。

まずは、すぐにお礼の手紙をくれた礼儀正しさに感動しました。きっとその生徒の保護者の方も顧問の先生も、感謝の気持ちを持つことを常々話されているのでしょう。

そして手紙を読んでみて、中学生もミニバスの児童と同じように、バスケットボールができる日を待ち望んでいることがよく分かりました。みんな、頑張れ～！！

さて暗い話題ばかりだと元気が出ないので、なんとか明るい話題を届けようと思って

いるのですが、実際にバスケットボールの練習や試合ができないと、なかなか面白い事が見つかりません。今回のコラムもスポーツ新聞からのものですがお許しください。

今回は前回に続き「指導者と選手の絆 その2」というテーマで、指導者の思い、競技者（選手）の思いを参考に私の所見を述べてみたいと思います。

最初はスポーツとは直接関係ありませんが、これからスポーツを続ける上でも、また何かの行動を始めようと思う時にも参考になることです。

これは、慈恵医科大学大晴海トリトンクリニックの横山啓太郎所長の話です。

<まずは意識を変える>

「私たちが何かの行動を始めたり変えたりする時に大切なのは、次の3段階です。

- ①自分自身のマインド（意識）を変える
- ②自分を知り、どうありたいかを考える
- ③自分にちょうど良いことを習慣化する

マインドが第1段階なのは、ここを変えないとすべてが始まらないからです。心が変わらなければ、行動は変わらないのです。

私が行動変容外来を始める上でヒントになった言葉があります。それはアメリカの哲学者の言葉です。

「心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる。」

「まずは意識から」。これは私が指導しているチームにおいてもずっと言い続けていることですが、練習でも試合でも「意識」はとても大切です。

今のコロナ禍の中、ミニバスの多くの選手が自主練習をしていることでしょう。その練習を行う際、これまでとはちょっとだけ「意識」を変えてみてはいかがでしょうか。

同じスキルをコツコツと続けることも大切です。でも、自分はどのようなプレイがしたいのか、どんなプレイが上手になりたいのかを「意識」しながら練習すれば、それが習慣化し、これまで以上スキルが身に付き、きっと練習や試合で役に立つと思います。

<感謝と自分らしさ>

新大関御嶽海が伝達式で、郷土愛あふれる口上を述べて、大関としての決意を語った。

「大関の地位を汚さぬよう、感謝の気持ちを大切にし、自分の持ち味をいかし、相撲道にまい進して参ります」。

大切な二つの言葉を用いた。一つ目は、長野・福島中相撲部の恩師、安藤均さんの「感謝の気持ちを忘れないで相撲を取りなさい」という言葉。もう一つは、出羽海部屋OBで元立行司の28代木村庄之助の言葉が刻まれた福島中の石碑から取った。「絶対にこの言葉を使いたかった。いろんな人に支えられた感謝を込めた」と御嶽海。

現相撲部の上村裕一監督は「あの言葉が間違いなく御嶽海の礎になっている。口上で使った時は驚いたけど、すごく嬉しかった」。

新大関伝達式の口上では、いろいろな言葉が使われます。でも、御嶽海関が迷わずこの言葉を使ったのは、きっと恩師や石碑の言葉を忘れず、ずっと「感謝の気持ち」と「自分らしさ」を意識してきたからでしょう。

私もこのコラムで常々「感謝の気持ちの大切さ」を述べていますが、この口上を聞いた時、本当に大関の素直な気持ちが伝わるすばらしいものだと思います。

次からは高校野球の話題です。

このコロナ禍の中、嬉しい話題としては、春の選抜高校野球に広島県から広島商業高校と広陵高校の2校が選ばれたことでね。

実は私も大昔は、青光りのする5厘刈り丸坊主の高校球児でした。

チームは夏の県大会ベスト16でしたが、個人的には4番打者で通算打率は4割2分でした（ちょっと自慢です・・・笑い）。

ここでは、選抜から漏れた、静岡県・聖隷クリストファー高校についての話題と広島商業、広陵高校についての話題をお伝えします。

まずは東海大会準優勝にもかかわらず、選抜大会の選に漏れて補欠校に回った静岡県・聖隷クリストファー高校についてです。

<人生は思い通りにならない>

午後3時から大会本部からの連絡を待ったが、吉報は届かなかった。約30分待った後、静岡県高野連から届いたのは、補欠校になったという知らせだった。

上村監督はスーツ姿のままグラウンドに直行。ナインに「残念ながら、大会本部からの連絡はありませんでした。私は間違いなく選ばれると思っていましたが」と伝えた。そしてこう続けた。

「人生は思い通りにならない」

これは吉田兼好が著した随筆「徒然草」の189段。そこには「期待していたことはうまくいかず、思ってもいないことがうまくいく。（人生は）どうなるか分からないものと考えただけが、真実である」との意味がつづられている。

けが人続出の逆境を自力ではね返した東海大会とは違い、選考は自分たちの力ではどうしようもない。「納得しなさい」というのは酷な話だ。

エースの弓達主将（2年）は気丈に振舞った。「非常に残念。甲子園は高校球児の夢。夏に1番をとれるようにやっていきたい」。一切、動揺の色は見せなかったが、それでも上村監督はナインを気遣った。

「（春の選抜は）予選を持たない大会と分かっている。人生は思い通りにならない。私は大人だから（選ばれなかった現実を）受け入れられるが、子どもたちは受け入れられるか心配。メンバーがそろわなかった東海大会での準優勝は評価されていい」。全く予想外の事態に一気に言葉を吐き出した。

翌日、上村監督は校長として出勤。朝の職員会議では、教員らに期待されながらも初の甲子園出場がかなわなかったことに頭を下げたという。

今回の選考に関して「高野連には抗議文などを出すつもりはない」としながらも、一晩たっても、まだ心の整理はつかなかったようだ。

東海地区の出場枠は2枠。東海大会での優勝・準優勝チームの選出が濃厚とみられていましたが、優勝チームは選ばれたものの、準優勝の静岡県・聖隷クリストファー高校は選ばれませんでした。

選考委員会でも選出を巡って意見が拮抗したようですが、「勝つ可能性が高いことを基準に判断」という理由で、別の学校が選ばれました。

春の選抜大会は、選考委員会の推選で選ばれますが、今回の決定に対しては多くの方がツイッター等で言及しました。メジャーリーグのパドレスで活躍するダルビッシュ有投手もその一人ですね。そして今だにいろいろなところでこの話題に触れる人が多いのをみても、やはり大変な出来事だったのですね。

次は、広島商業高校についてです。

私にとって広島商業と言えば、何といたっても達川光男さんです。牛田中学校野球部の2つ上の先輩ですが、自分の中では人生の師・恩人と思っています。

私が中学校を卒業する時には、達川さんから広島商業に来るよう誘われましたが、とても練習についていく自信がなく断りました。別の高校に進学して、何度か広島商業の練習を見に行きましたが、私などきつと1日で弱音を吐くほどとても厳しいものでした（本当に行かなくてよかったです・・・笑い）。

また達川さんが高校3年の時、夏の甲子園で優勝した際には、出場記念メダルのレブリカを買ってきてくださいました。それは今でも我が家の「家宝」です。

<10度目の全国制覇、石碑を埋めるためにやってきた>

広島商業高校は、創部123年の歴史があり、出場32校で最古。その歴史校には春の大会を制し、刻みたい歴史がある。

同校の正門を抜けてすぐ右手に「優勝記念」と彫られた石碑がある。春夏合わせて甲子園7度の全国制覇に加え、国民体育大会2度の優勝。合計9度、日本を制した大会が記されている。

その石碑には10個の枠が用意されているが、10度目の全国制覇を示すスペースは、今だ文字は彫られていない。

植松主将は「毎朝通学時、目に入る。伝統を力に変えたい。もちろんあそこを埋めるためにやってきた」。

OBで同校の指揮をとる荒谷監督も「自分が入学した時も顧問の先生に聞いてあそこを埋めるために頑張ってきたが埋められなかった。今、指導者としてあそこを埋める立場に携われるのはありがたい」。

最後の全国優勝は88年夏。34年間、広島商ナインが石碑に新たな文字を入れることを目標にしたが、手が加わることはなかった。

広島商ナインの思いは一つ。全国制覇で「10番目」を埋める。

<OBからのエール（中国新聞より）>

達川光男・広島東洋カープ元監督、現解説者

「今年は不思議なチーム。強さはないけれど、粘り強さがある。個々はひ弱でも全員での戦いぶりがたくましい。昨秋の神宮大会で優勝した大阪桐蔭と初戦でぶつかってほしい。勝てる気はせんよ。でも負ける気もせんね」

最後に広陵高校についてです。

広陵高校と言えばやはり中井哲之監督。以前、このコラムでも「補欠の力」という本のことを紹介しました。その中井監督の指導者としての原点が意外なところにあったこと、指導において日頃から大切にされていることを、今回の甲子園出場を機に知ることができたので紹介します。

また、資料の中に出てくる二岡選手ですが、お兄様が以前、五日市小学校で教員をされており運動神経抜群でした。今は三次におられますが、実は私の観音ミニバスの時の教え子が、三次に転居した際、中学校で二岡先生にバスケットボールを教えてくださいました。そしてその縁で、巨人の二岡選手からサインボールをもらいましたが、そのボールもまた我が家の「家宝」です（家宝がいくつあるの・・・笑い）。

<『広陵？ どこですか、その学校』 指導者生活は、意地から始まった>

中井監督が広陵高校のコーチになった年、当時監督の松元信義氏から「〇〇中学校にすごい選手がおるらしい。勉強じゃ思うて見てこいや」との指示で、〇〇中学校に足を運んだ時の出来事が、指導者としての出発だそうです。

「中学校の顧問の先生に来意を告げると『広陵？ どこですか、その学校』と言われ門前払いされました。確かに、甲子園から遠ざかっていましたけれど、それにしても、広島県で野球の指導をしていれば広陵を知らないはずはないでしょう。それが『どこですか』とは・・・。甲子園から遠ざかると、そういう目で見られるのか、よ～し見とけよ！と。指導者生活は、そういう意地から始まったんです」。

コーチになった当時は、少しは改善されたとはいえ、まだ厳しい上下関係が残っていたそうです。

「コーチ時代は、1年365日を寮に泊まり込み、部員たちと生活をともにしました。そうすれば理不尽なことも減るでしょうから。また寮での日常の生活ぶりは、グラウンドにも表れます。ですから『靴をそろえよう』『ゴミを拾おう』『食器を自分で下げよう』『きちんと整理整頓しよう』と。最低限の日常生活心得を徹底するところから始めました」。

「毎日、全員の部屋を見て回りましたね。監督になってからも時々は寮に泊まりましたよ。驚いたのは、二岡智宏（元巨人他、現巨人2軍監督）の部屋。布団と勉強道具、野球関係のもの以外、一切とっていいほど私物がないんです。野球への取組という点でも、二岡は飛び抜けていましたね。練習の量、質ともにスキがないし、自主練習をすると、自然に全員がついていく。後に巨人でスター選手になっても、オフには必ず、真っ先にグラウンドに来てくれました。親御さんなどは、『家に帰るよりも先に、まず先生の所へ行くんですよ』と苦笑してたくらいです」。

<OBからのエール（中国新聞より）>

中村奨成・広島東洋カープ選手

「広島商と戦う時は他の高校と対戦する時と雰囲気が違うし、伝統ある2校だと思う。今回は県大会、中国大会、神宮大会ともものすごい勢いで勝ってきた。もちろん実力も十分。その勢いのまま選抜も頑張ってもらいたい」